



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# 富士ゼロックス（株）岩槻事業所

5

### ——物流自動化投資案——

1984年の秋、石井事業所長（生産担当取締役）、森山製造部長、部品課の早川課長の3名は、事業所長室で、岩槻事業所の物流改善の進め方について、連日の検討を重ねていた。10日後に迫った本社管理部との検討会の席で、大型自動部品倉庫の設置案が、来年度の予算に組み入れられるべく、本社サイドから強く推奨されることは間違いなかった。しかし彼ら3人は、大規模な自動化のメリットとデメリットについて、慎重に検討する必要があると考

10

えていた。

## 会社の沿革

### 岩槻事業所の沿革

15

岩槻事業所は、大宮から約20分程東へ行った埼玉県岩槻市に位置し、1962年に富士ゼロックス(株)が設立されて以来、海老名事業所（神奈川県海老名市）、竹松事業所（神奈川県南足柄郡）と共に、富士ゼロックス社の生産部門の中核として、その発展を支えてきた（付属資料1参照）。当初、1961年に岩槻光機(株)として写真関連機材の製造をスタートし、徐々に複写機の生産比率を高めた後、1971年に富士ゼロックス岩槻工場となり、そして1983年初めの組織変更で富士ゼロックス社が製品別事業部組織に改組されたのを受けて、中大型複写機事業部門の中心工場として、岩槻事業所に改められた。1984年当時、敷地面積は約56000㎡、従業員数は約1200名で、敷地内に4つの工場建屋がレイアウトされ、一貫して複写機用部品の一部内製加工および本体の組立てを行なっていた（付属資料2に会社の最近5年間の財務諸表、付属資料3に事業所レイアウト図を示してある）。生産機種は、A0サイズ

20

25

の原稿をそのままの大きさをコピー出来る超大型機、B5～A3サイズまでの種々の原稿を扱える分速15枚～20枚程度の中速機が中心であった。

---

本ケースは、標記企業の全面的な協力と、巻末に示す参考文献に基づいて、慶應義塾大学ビジネススクール助教授 河野宏和が作成した。このケースは、クラス討議に用いるためのものであり、経営管理の良否あるいは関係者の判断の適否を示唆するものではない。ケース内の固有名詞および数値は一部変装されている。（1991年6月作成）

30